

甲賀市の文化財①6

水口岡山城の時代



郡中惣の体制下では、甲賀全域を支配できるような城はなく、秀吉政権下に時代の要請に応えるかのように築かれた城、それが「水口岡山城」です。

近江守護六角氏を攻略した織田信長は本能寺の変に倒れ、信長の後継として頭角を現してきたのが羽柴秀吉でした。

水口岡山城は、天正13年（1585）羽柴秀吉の命を受けて中村一氏（甲賀町滝出身）が築城したと言われています。

中村一氏は天正5年以降秀吉の陣営に加わり、軍功をたて、天正13年には、近江国水口を与えられるまでに成長していく人物です。

水口岡山城の構造を見てみると、頂部を一直線上に大きく6つの曲輪で構成し、それぞれの曲輪を堀切、塹壕によって仕切っています。そして各曲輪には帯曲輪や凹部を設けて、曲輪への入口としています。

本丸の中段には出升形状の突出した平坦な面が見られ、大手虎口と考えられています。北側山腹でも井戸をもつ曲輪が確認されていることから、付属施設が広がりをもつ可能性も指摘されています。

「水口藩士某覚書」によれば、城の築城に際して、三雲城（湖南市）の石垣や矢川寺別当の教覚坊圓乗坊を壊して櫓としたことなどが記され、古材を転用しながらの火急な城づくりであったことが伺えます。

中村一氏の駿府転封後は、天正18年（1590）に増田長盛（文禄4年（1595）に長束正家と秀吉政権下の五奉行として名を馳せる家臣団が城主となり、有事の際の東国方面への前線基地としての性格を担う一城であったとも考えられています。

こうして時代の要請に応じて築かれた水口岡山城も慶長5年（1600）、関ヶ原合戦で正家は西軍の石田方に属し敗れたため、岡山城も東軍に攻略され廢城となります。

正家は正室栄子姫とともに城を脱出。日野方面に逃れ自刃したと伝えられています。

やがて時代は徳川の世に移り、近世東海道が水口を通り、宿場町水口が重要視されていきます。かつて水口岡山城の城下として栄えた町並みは、新しい時代の水口城と水口宿の街づくりの中心にみ入れながら、見事に近世水口宿が大きな発展を遂げていくことも見逃すことはできません。

【問い合わせ】
文化財保護課
☎ 86-8026
FAX 86-8380

見えてきた! 水口宿本陣

宿場町を特徴づけるものといえば旅籠屋ですが、なかでも本陣は天皇の使者である勅使や、公家、大名、公用で旅をする幕府の役人などが宿泊するための特別な「旅館」であり、一般の旅籠屋と異なり、門・玄関・書院を設けることが許され、間口も広く宿場のなかで偉容を誇りました。

本陣遺構としては、草津宿本陣や、豊橋市の二川宿本陣が著名ですが、本市の土山宿本陣もその一部が守られており、「上段の間」などの特別なしつらいに、歴史の重みを感じ取ることができます。

ところで、東海道甲賀3宿のうち水口宿は本陣の間取り図がありません。代々鶴飼氏が本陣職を勤めた水口宿本陣は、建坪およそ202坪（約667㎡）と広大であったようですが、間取り図が残らないため建物を具体的にイメージすることが難しかったのです。ところが、このほど「東海道水口宿文書」を整理したところ、明治9年当時の建物の配置を示す買入れ絵図（写真）が見つかりました。維新後の宿駅制度の廃止は、今まで一般の

市史の小径

第14回

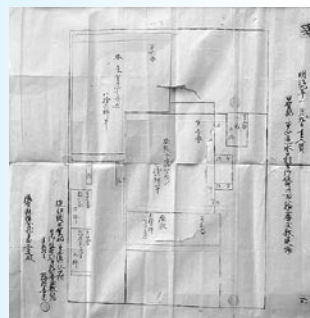
街道を歩く
その4

旅人を相手にしなかった本陣や脇本陣にとくに大きな痛手となったのでしょうか。

残念ながら絵図は簡略で間取りまでは不明ですが、東海道に面して「本屋」（居宅部分）と「座敷」（宿泊棟）の別があり、宿泊者は居宅部分を通らずに門をくぐって式台に駕籠をつけ、ここから直接奥の座敷へ進むという

本陣に共通の構造を持っていることがわかります。

謎の多い水口本陣の実態に迫る一歩といえ、今後さらに調査を進める予定です。



●見つかった旧本陣建物絵図

【問い合わせ】総務課市史編纂係
☎ 86-8075 FAX 86-8380